# 至仏山「登山道利用実態調査」報告書

# 2006 年 5 月実施 2006 年 7 月実施



荒廃の進む至仏山東面登山道(標高1800メートル付近)

NPO法人尾瀬自然保護ネットワーク

## NPO 法人「尾瀬自然保護ネットワーク」について

25年の活動実績を持つ「尾瀬の自然を守る会」が1996年12月に解散したため、 守る会の尾瀬自然保護指導員であった有志により翌年3月に「尾瀬自然保護指導員ネット ワーク」が設立された。

その主な活動内容は、福島県側の「バス添乗解説(御池〜沼山峠間/会津バス)」、群馬県側の「尾瀬ヶ原における定点指導」「至仏山東面登山道調査」「尾瀬ヶ原野生ジカ頭数調査 (夜間)」「尾瀬を主体とした自然観察会」および「尾瀬自然保護指導員の養成」などを行っている。

その後、2003年9月には特定非営利活動法人(NPO)の認可を受け、「尾瀬自然保護ネットワーク」に改組して現在に至っている。

## 謝辞

特定非営利活動法人「尾瀬自然保護ネットワーク」は、1997年の発足当初から毎年定期的に至仏山東面登山道(至仏山頂〜山の鼻間2.9 km)の調査を実施してきました。

このたび、調査開始10周年の調査報告書を作成するにあたり、 株式会社「オーエムシーカード」のご支援を得て、2006年(平 成18年)の調査結果を『至仏山登山道利用実態調査報告書』と して発刊することができました。

永年にわたり調査費用を助成していただいた株式会社「オーエムシーカード」に対して、厚く御礼申し上げます。

2007年2月

特定非営利活動法人 尾瀬自然保護ネットワーク 理事長 髙橋 喬

### 至仏山「登山道利用実態調査」報告書

NPO 法人 尾瀬自然保護ネットワーク 理 事 長 高橋 喬 担当理事 永鳥 動

(はじめに)

至仏山は蛇紋岩の影響を受けた特異な地質により、森林限界は1700メートルと低く高山植物の宝庫としても知られています。さらに、至仏山は交通の便も良く深田久弥の日本百名山としても人気が高く、好展望の山頂は休日には登山者で埋め尽くされるほどです。このため、登山者の踏み付けや雨水による表土の流失が続き裸地化(植生破壊)が拡大しています。滑りやすい蛇紋岩と安易な入山による事故が毎年発生しています。

至仏山東面登山道(至仏山頂〜山の鼻)は、植生の保護・登山道の整備・植生の復元等の理由で、平成元年より閉鎖されていましたが、平成9年8月1日に9年振りに再開されてしまいました。

尾瀬自然保護ネットワークでは、本会の発足(平成9年3月発足、当時の名称は「尾瀬自然保護指導員ネットワーク」)と東面登山道の再開を契機に平成9年8月に第1回の調査を行い、以降毎年夏期に至仏山東面登山道の利用実態調査を実施して来ました。

今年は至仏山東面登山道調査開始10周年に当り、5月に残雪期の南面登山道(鳩待峠〜至仏山頂)の利用実態調査を行い、更に7月には指導員研修会を兼ねて東面登山道と南面登山道の調査を実施しましたので、その調査結果を報告書としてまとめました。

I. 調查名称 「至仏山登山道利用実態調査」

今年度は調査開始10周年を記念して残雪期と夏期の2回実施しました。これまでは東面登山道を主体に調査を行いましたが、今回は南面登山道を含めた至 仏山の全登山道を調査対象としました。

- Ⅱ. 調査日程 ・平成18年5月4日(木)~平成18年5月5日(金)
  - ・平成18年7月7日(金)~平成18年7月9日(日)
    - (1) 5月5日(金):残雪期至仏山南面登山道調査
      - (2) 7月8日(土):夏期至仏山登山道調査
      - (3) 7月9日(日):夏期笠ヶ岳登山道調査
      - \*宿舎は7日、8日とも片品村戸倉の温泉民宿「一仙」を利用しました。
- (注) 夏期の笠ヶ岳登山道調査は悪天候につき、オヤマザワ田代の先「笠ヶ岳への分岐点〜悪沢岳」の区間しか調査できませんでしたので、本調査報告書には掲載 しておりません。

#### Ⅲ. 調査コース

- (1) 鳩待峠~オヤマザワ田代~至仏山
- (2) 鳩待峠~オヤマザワ田代~小至仏山~至仏山~高天ヶ原~山の鼻
- (3) 鳩待峠~オヤマザワ田代~悪沢岳 (悪天候のため笠ヶ岳の調査は断念)

#### IV. 調査メンバー(全員、本会の「尾瀬自然保護指導員」)

(1) 5月5日(金): 残雪期至仏山南面登山道調査

加藤憲司(埼玉県伊奈町)

坂本敏子 (千葉県千葉市)

鎮目安康(埼玉県行田市)

清水博之 (群馬県高崎市)

永島 勲 (埼玉県本庄市)

西山伸一(神奈川県横浜市)

前田悦子 (千葉県千葉市)

前田佳胤 (千葉県千葉市)

松前雅明(福島県郡山市)

横田有弘(埼玉県さいたま市)

吉田敏男(埼玉県寄居町) 11名

(2) 7月8日(土):夏期至仏山登山道調査

島崎成利(東京都青梅市)

島田富夫(神奈川県相模原市)

永島 勲 (埼玉県本庄市)

西山伸一 (神奈川県横浜市)

藤田英忠 (千葉県東金市)

松前雅明(福島県郡山市)

6名

(3) 7月9日(日):夏期笠ヶ岳登山道調査

東雲 明(埼玉県朝霞市)

島崎成利 (東京都青梅市)

永島 勲 (埼玉県本庄市)

西山伸一(神奈川県横浜市)

藤田英忠(千葉県東金市)

松前雅明(福島県郡山市) 6名

## V.残雪期の至仏山登山利用実態調査

鳩待峠への道路の除雪が終わり、道路開通直後として入山者の多い GW に残雪期の至仏山 南面登山道(鳩待峠~至仏山)利用実態調査を行いました。今回は残雪期の調査としては平 成10年に次ぐ2回目の調査となりました。

#### ○調査日

・平成18年5月5日(金・祝日)天候:快晴

#### ○調査方法

- (1) アンケートによるヒアリング調査
- (2) マイカーの駐車台数調査
- (3) 入山者数の調査
  - (4) 鳩待峠~至仏山の登山中における入山者の利用実態調査

の4項目について調査を行いました。詳細については下記の調査総括および5~8ページ の調査結果をご覧下さい。

#### ○調査総括

鳩待峠へのマイカー乗り入れは145台と多く、うち路上駐車は35台あった。これは残雪期には「マイカー規制」がないことに加え、重いスキー板やボードを持って公共の交通機関に乗り換えるのを嫌ったためと思われます。また、路上駐車については鳩待峠の駐車台数をオーバーする車の乗り入れがあったためと思われます。もしくは、駐車料金を支払うのを回避するために路上駐車したと思われます。

(参考) 駐車料金は鳩待峠の駐車場で2500円、戸倉の並木駐車場は1000円です。

路上駐車が多い点からも、GW期間中でも戸倉〜鳩待峠は「マイカー規制」を実施すべきであると感じました。最終的にはマイカー規制は通年にすることが望ましいと考えます。

鳩待峠近の登山道における積雪は2メートル。今年は例年より多いようでした。この時期 の雪は締まっていて靴が潜ることもなく比較的歩きやすい。

道路開通による交通の便と山岳展望に恵まれ、更に至仏山南東斜面はスキー向きのなだらかな斜面が続くため、入山者が多いものと思われます。

入山者(233人)の内訳は、登山者が136人で58%、スキーヤーが76人で33%、ボーダーが21人で9%であった。ボーダーには若者が多かった。単独の入山者は少なく、ほとんどがグループ(最大は9人)による入山であった。

アンケート結果からは残雪期の尾瀬には3回以上の入山者が12件とリピーターが多かった。登山者は鳩待峠から至仏山頂往復が11件と多く、スキーヤーやボーダーは当然ながら至仏山頂から山の鼻に下りる人が殆ど(8件)であった。

鳩待峠から10分ほど登った稜線上に「テント」一張あり(男子2名)。特別保護地区内 につきテントは指定された場所以外では禁止の旨を説明して理解を求めました。

登山者の登山装備面では、スニーカーでザックなどの装備を持たない家族連れ(5人=夫婦+子供3人:小学生低学年)がいたが、鳩待峠から30分ほど登った地点で下山していった。この家族連れ以外は程度の差はあったが、残雪期向きのしっかりした装備(アイゼン・防寒衣等)が多かった。また、少数ではあったが「スノーシュー」の登山者も見られた。

登山コースは入山者が多いのに加えて、トレースもしっかりしていたうえ、樹木への赤丸や赤布で迷うことはなかった。コースは夏道とは異なり、かなり右より(オヤマ沢側)にあり、小至仏山のピークは通らずに東側をトラバースして至仏山へは稜線の南斜面から登るようになっている。私たちが調査した範囲では登山道(トレース)を外して歩く人はいなかった。

雪上に出た木の枝や雪で折れ曲がった幹の上をスキー板で踏みつけてしまった箇所が散 見された。

(注) スキーヤーやボーダーがどの斜面を滑っているのかは調査しておりません。

コース全体でゴミは極めて少なく、拾ったゴミは「お菓子の空箱」とアイゼンの「雪除け板」がそれぞれ1個ありました。

入山料については半数の方が1000円、3割の方が500円と回答し、自然保護等に有効活用するなら2000円でも良いという意見もありました。入山料反対の方も1名いました。入山料徴収に関しては金額の多寡を問わなければ肯定的な意見が極めて多かった。

自然公園法の改正により法律上も入山料徴収(自然公園法第23条の「手数料」)や入山規制(自然公園法第15条および16条による「利用調整地区」の指定)への道が開かれたので、その第1歩として至仏山の「入山料徴収」と「入山規制」に向けた具体的な検討を進めて早期に実施に移していただきたいと思います。

実施に当たっては入山料の料金や入山規制総枠の根拠等の開示および効率の高い徴収(入山規制)システムの開発、更に入山料の使途についても極力、尾瀬の自然保護に有効活用されるよう要望いたします。

(注) 至仏山は残雪期には「入山禁止」となります。

植生の保護のため平成10年から毎年GW明けの5月11日から6月30日までの 51日間、至仏山登山道は全面閉鎖されます。

(参考)

## 至仏山の入山者数の推移

(平成13年~平成17年の5年間)

	THE PARTIE AND LAND L	(単位:人)
年	至仏山の入山者	尾瀬全体の入山者
平成13年	32,724(7. 3%)	448,041
平成14年	25,075(6. 1%)	409,942
平成15年	23,374(6. 1%)	384,257
平成16年	24,937(7.3%)	341,558
平成17年	20,036(6.3%)	317,558

(注)%は全体の入山者に対する至仏山入山者の割合 (出典:環境省の調査発表)

## 残雪期の至佛山登山アンケート結果および内容について

- 1 調査日 2006・5・5 (金)
- 2 調査場所・時間 鳩待峠 AM:800~・・・・ (A)

至佛山頂 AM:11:30~··(B)

- 3 調査件数 (A) 1 0 (B) 11 計 2 1件
- 4 結果および内容
  - (1) どちらから来られましたかでは、群馬県が7件で最も多く、次いで東京、埼玉、神奈川県で遠方では、愛知 (名古屋)、静岡から来たグループもいた。
  - (2) グループでの登山がほとんどで、単独は2人だけで中には9人や、5人の大 学のグループもいた。
    - (3) 目的は、山スキーと登山で二分していた。
    - (4) 残雪期には、3回以上来ていると答えた者が12件と多かった。
    - (5) コースとしては登山者は、鳩待~至佛往復 (11)、山スキーは、鳩待~至 佛~山/鼻~鳩待 (8) が殆どであった。
    - (6) 尾瀬は、「全て良い)で、「今後も来たい」は100%であった。
    - (7) 入山禁止等の意見は、やむを得ないが (11)、当然 (8) で 90 %が入山 禁止には、協力的で「困る」は1件のみ。
    - (8) 入山料は、1000円が約50%で中にはそれなりに管理がなされていれば 2000円でも0Kという意見もあった。
    - (9) 残雪期での経験は、至佛山以外は燧ヶ岳が15件と最も多く次いでアヤメ平 笠ヶ岳で中には景鶴山の経験者もいた。
    - (10) 全体的には、この時期は山スキー (ボードも含む) と登山で年齢は20~ 50代と幅広いが60以上とみられる高齢者はさすが少ない。 また、入山禁止等では、常識的な回答で自然保護に対する配慮は協力的な ものと感じられた。
      - ※ 本調査は、坂本、前田(悦)、前田(佳)、清水が担当した。

えてい	(21)
	残雪期の至佛登山について 《アンケート》
	对车 7 神余川 2 福島 1
1	どちらから来られましたか 県名 ( 埼玉 3 栃木 1 静岡 /
0	東南《官城》(复知)
2	単独ですか、グループ (・2~9 人) ですか 8件か 2人のプルーフンタ いの179人
3	日程 (1) 日帰り (2) 1泊2日 (3) 2泊以上 タイセグルー (7) (2) たるのワッグルケス
4	目的 (1) 山スキー (2) 写真 (3) 登山 (4) その他
5	<b>残雪期は今回で何度目ですか</b> (1) 初めて (2) 2回目 (3) 3回以上 ・⑥ ·③ ·②
6	今日のコースは (1) 鳩待・至佛往復(//) (2) 鳩待・至佛・山/鼻(8)
	(3) その他② 平を安へ①
7	尾瀬で気に入っている場所は (尾:をすべて、そんに、だなないと)
8	これからも来たいと思いますか (1) はい (2) いいえ
9	至佛山の入山禁止・入山料等が検討されていますがどう思いますか
	(1) やむをえない((2) 当然である(8)
	(3) 困る ① (4) わからない ①
1 0	その場合入山料は、どのくらいが適当と思いますか
	(1) 500円 (2) 1000円 (3) 1500円 (4) 2000円 (7) たいうかよい (7) たいうかよい (あるといった人) ↓ に対する (あるといった人) ↓ にいった人) ↓ にいったん) ↓ に
1 1	尾瀬で至佛山以外の登山経験はありますか (あるといった人) ↓
	(1) 燧ヶ岳 (5) 2) 笠ヶ岳 (3) アヤメ平(7)
	(4) 景鶴山(1)(5) その他(1) な(3)
	平位17年 2000日 · 1000日 ·
	(出产物)水土分分,从有1.6万分,从产物的1.6万分,以

a .

## 残雪期の鳩待峠の駐車台数の調査結果

調査日:2006年5月5日(金)

NPO尾瀬自然保護ネットワーク 調査担当; 鎮目 安康

<行き=登山前>

1. 並木駐車場 約80台(調査時間; 7時28分)

2. 路上駐車 右側 23台(調査時間; 7時30分~ 7時55分)

左側 12台(調査時間; 7時30分~ 7時55分)

3. 鳩待峠 (バス停周辺) 50台 (調査時間; 7時55分) 鳩待峠 (ヘリポート) 60台 (調査時間; 8時00分)

<帰り=下山後>

4. 鳩待峠 (バス停周辺) 22台 (調査時間; 14時00分) 鳩待峠 (ヘリポート) 49台 (調査時間; 14時03分)

5. 路上駐車 右側 6台 (調査時間; 14時26分~14時45分)

左側 20台 (調査時間; 14時26分~14時45分)

6. 並木駐車場 25台(調査時間;14時45分)

#### 【感想】

私たちは戸倉からマイクロバスで鳩待峠に上がったが、鳩待峠までマイカーで乗りつける人 が圧倒的に多い。

朝方の鳩待峠(路上駐車も含む)周辺の車は145台

戸倉の並木駐車場の車は80台

(注)並木駐車場は最大250台の駐車可能です。

→これは残雪期にはマイカー規制がないことに加え、重いスキー板やボードを持って公共の 交通機関に乗り換えるのを嫌ったためと思われます。

GW の後半の快晴日のためか、鳩待峠付近での路上駐車も多かった。

→これは鳩待峠の駐車台数をオーバーする車の乗り入れがあったためと思われます。 もしくは駐車料金を支払うのを回避するためかもしれない。

路上駐車が多い点からも、GW 期間中でも戸倉~鳩待峠は「マイカー規制」を実施すべきで あると感じました。

## 残雪期の「至仏山登山道利用実態調査」入山者数の調査結果

- (1) 調査日時 2006年5月5日(金) 8時00分~14時00分、天候:快晴
  - (2) 調査項目 残雪期における至仏山の「登山者・スキーヤー・ボーダー」の人数
- (3) 調査担当者 尾瀬自然保護ネットワークの吉田敏男・加藤憲司の2名
  - (4) 調査結果

	登山者(人)	スキーヤー (人)	ボーダー (人)	計 (人)
8時00分 鳩待峠	5 0	1 7	2	6 9
1 0時3 0分 オヤマザワ田代	到着時には O	休憩者ナシ	0 (0.5)	0
11時20分 至仏山山頂	4 5	2 7	7	7 9
11時20分か ら13時50分 までの下山時に すれ違った人	2 2	1 9	8 8	4 9
13時50分 鳩待峠 到着時	1 9	1 3	4	3 6
総 計 (構成比:%)	1 3 6 (58.4)	7 6 (32.6)	2 1 (9.0)	2 3 3 (100.0)

#### (威想)

#### 入山者のマナーの件

尾瀬地区は文化財保護法により「特別天然記念物」に、また自然公園法により「特別保護地区」の指定を受けているが、法律で保護されていることと同時に、してはいけない事が、周知されていない。要するに、法律で保護されほど貴重な自然であるいう事が、入山者に希薄のように感じる。

例:マイカー規制前だといって車で鳩待峠まで乗り入れる。

稜線上にテントを張っている。

観光が第一優先で、保護が第二のように思われてならない。自然公園法の目的は保護と利用の増進を謳っているが、自然保護と利用のバランスが取れていない事に、マナーの悪さの根本があるように思います。

## 残雪期の「至仏山登山利用実態調査」記録写真

調査日:平成18年5月5日

(A - 1)



マイカーがあふれるゴールデンウィークの鳩待峠

(A - 2)

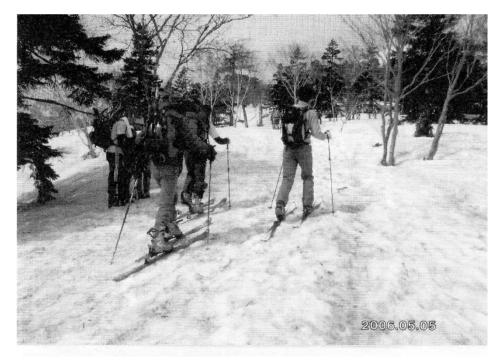


鳩待峠でアンケート調査をする会員

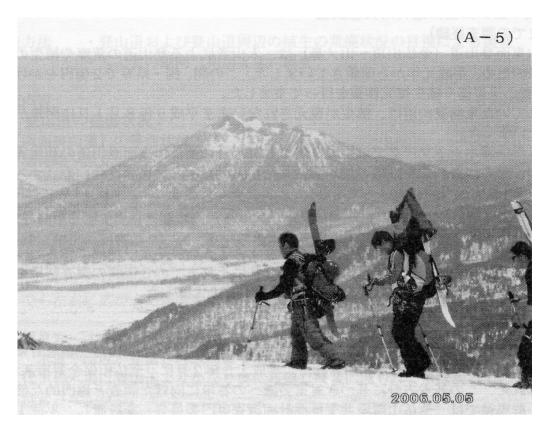


この辺りで積雪は約2メートル 残雪期は登山者の外にスキーヤーやボーダーも多い

(A - 4)

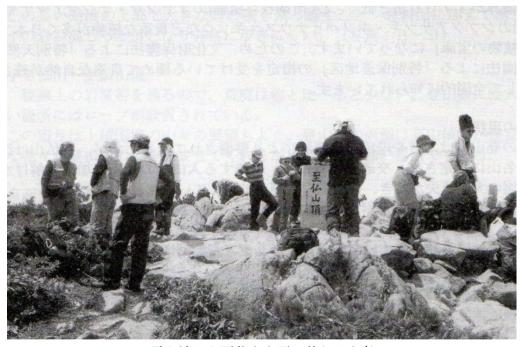


スキー板もアルペンスキーの他にテレマークスキーや クロスカントリースキーなど様々だ



ボーダーには若者が多い。オヤマザワ田代付近にて

(A - 6)



雪も消えた至仏山山頂で憩う入山者

#### VI. 夏期の至仏山登山道利用実態調査

#### (これまでの調査経緯)

至仏山東面登山道(至仏山頂〜山ノ鼻)は、入山者による登山道の荒廃や植生の保護・安全確保のため、平成元年から閉鎖さていました。この間、国・県等で2億円をかけて2.9Kmの登山道整備や植生復元作業を行って来ました。

閉鎖されていた東面登山道は、植生が復元されないまま平成9年8月1日に閉鎖が解除されてしまいました。

尾瀬自然保護ネットワークでは平成9年より毎年夏に至仏山東面登山道の利用実態調査を実施し、その調査結果を「緑の地球防衛基金」・「日本自然保護協会」や「マスコミ」等を通じて「登山道再開における問題点」として発表してきました。平成14年には国会(参議院の「環境問題特別委員会」)でも取り上げられて、現在の「至仏山保全緊急対策会議」設置の契機になりました。

また、(社)日本旅行業協会の平成16年度JATA環境基金「地球にやさしい市民活動支援助成基金」の支援を得て、平成17年2月にそれまでの8年間の調査結果を取りまとめた『至仏山東面登山道定点調査記録集』を発刊いたしました。

#### (行政側の対応経緯)

平成14年5月に尾瀬保護財団を事務局に関係機関による「至仏山保全緊急対策会議」が設置され、保全対策の検討が開始された。平成15年2月に「至仏山保全対策基本方針」が策定された。この基本方針に基づき対策会議への答申に向けた調査と専門的な検討を行うため、群馬県では「至仏山環境共生推進計画調査専門委員会」を設置し、平成15年度から2年間調査を行いました。(調査そのものは「日本自然保護協会」に委託)

平成17年11月に日本自然保護協会から専門委員会に対し、詳細な調査結果に基づく 具体的な保全策が提出された。これを受けて平成18年度からようやく行政による本格的 な対策が実施に移される見込みでしたが、現時点ではその具体策の取りまとめが難航し引 き続き検討が行われている段階で、当初の予定より大幅に遅れている状況です。

#### (至仏山の特徴)

至仏山 (標高2228m) は尾瀬で一番古い山で、蛇紋岩の影響を受けた特異な地質により、森林限界が1700mと低く、[氷河期残存植物]のオゼソウ・チシマアマナや[蛇紋岩変形植物]のシブツアサツキ・ホソバヒナウスユキソウなど貴重な植物が多く日本でも有数の「高山植物の宝庫」になっています。このため、文化財保護法による「特別天然記念物」と自然公園法による「特別保護地区」の指定を受けている極めて貴重な自然が残されている山域として全国的に知られています。

#### (登山道の現状)

至仏山の登山道は木道や階段等の敷設により整備されてきましたが、至仏山は深田久弥の日本百名山に指定され、交通の便もよく、増加する入山者の踏圧に加え雪解け水や雨水による土壌の大量流失が続き、登山道の荒廃が拡大しています。

蛇紋岩質の特異な土壌と急斜面、更に登山道の一部が脆弱な「雪田地帯」を通っている ため、登山道周辺の植生破壊が進行し、地下の岩盤が露出している箇所も多数あります。 また、蛇紋岩は硬く滑りやすいため、毎年スリップや転倒による事故が発生しています。

なお、至仏山の登山道は、植生保護のため平成10年からは残雪期(5月11日~6月 30日)の登山道(鳩待峠~至仏山~山ノ鼻)は全面的に閉鎖されています。

- ○調査日 ・平成18年7月8日(土)天候:晴れ
- ○調査コース ・至仏山南面登山道(鳩待峠~小至仏山~至仏山頂)

- ・至仏山東面登山道 (至仏山頂〜山の鼻)
- ○調査方法
- ・登山道および登山道周辺の植生の荒廃状況の目視による調査
- ・入山者の動向(利用実態)調査

#### ○調査内容

#### (1)登山道の整備状況

【南面登山道】の整備状況

· 鳩待峠~原見岩

鳩待峠から数分登った所では登山道が溝状に深く掘り下げられていた。これは数年前ではあまり目立たなかった荒廃状態である。あくまでも推測であるが、登山者の踏圧に加えて最近多くなった一極集中的な降雨(いわゆる「集中豪雨」これも地球温暖化の影響か?)により、登山道に大量の雨水が一気に流下ることによるものと考えられる。(写真:B-2、3、5)

このように溝状になると歩きにくくなるため、一部ではあるが樹林帯内の登山道でも左右に広がった箇所や広がりつつある箇所が見られた。(写真:B-4)

#### ・原見岩~オヤマザワ田代

木道や階段が整備され以前よりだいぶ歩きやすくなっていました。オヤマザワ田 代下の水場は登山道よりかなり奥に移動し残雪に埋もれて水は濁っていて飲料水に は適さなかった。

#### ・オヤマザワ田代~小至仏山

笠ヶ岳への分岐点を過ぎ、小至仏山から南に延びた小尾根(稜線)の末端を東に回りこむと「展望テラス」があり、7~8人の登山者が休憩していた。 展望テラスから上の登山道は稜線と雪田との境にあり高山植物が非常に多い箇所で、長い木製の階段が続く。(写真:B-6、7)

稜線の東側を通るこの辺りが南面登山道で一番荒廃の激しい場所となっている。

稜線側の裸地化した斜面には丸太の柵があるが、表土から浮き上がっていて土壌 の流失防止の効果は疑問である。(写真:B-8)

この長い階段の上部で大きな岩の壁を乗っ越すこと、急斜面に加えて滑りやすい大小の岩が混じった道となり非常に歩きにくい。 (写真: B-9)

#### • 小至仏山~至仏山頂

稜線上の岩稜帯を通るので、荒廃は他と比べると少ない。登山者に侵入されやす い箇所にはロープが設置されている。

この辺りは上越国境の山々の展望もよく、登山道の両側は高山植物が豊富で、可憐な花々が登山者の心を和ませてくれるが風当たりの強い場所でもある。

#### 【東面登山道】の整備状況

#### ・至仏山頂~高天ヶ原

この区間は比較的なだらかな斜面が続き、木製階段も整備されて荒廃はそれほど深刻ではないが、山頂直下の南側をトラバース気味に通過する箇所(標高2200m)では特に山側の斜面は侵食が広範囲に広がっている。(写真:B-12)

この辺りの斜面の植生は矮小の笹が密生している点から視て、荒廃の原因は登山者の踏み付けと思われます。今では、赤茶色の土壌とともに地中の岩石が露出していて痛々しい。立入禁止のロープと土留め用の丸太の柵が所々に設置されているが、このまま放置(土壌流失防止策の強化や植生復元をしない)しておくと、雪解けや

降雨のたびに土壌の流失が繰り返され、ますます荒廃が拡大してしまうことは一目 瞭然である。

・高天ヶ原~中間地点

東面登山道一番の急斜面で、高天ヶ原直下では尾瀬ヶ原に飛び込むような感じの 斜度で急降下している。(写真:B-13)

標高  $2000\sim1900$  メートルの「G地点」や「F地点」では大小の蛇紋岩が散乱する斜面を木製の階段や登山道が続く。(写真:B-14)

この区間は、地中の岩盤が露出している箇所(写真:B-15)や鎖場もあり、 下りで一番苦労するところである。

• 中間地点~森林限界

ここには東面登山道で最も広範囲に荒廃している「D地点」(標高1800メートル)がある。(写真:B-18、19、20、21) 尾瀬ヶ原から見て分かるようにD地点は、その形から南米大陸と言われている。(別紙、D地点拡大図を参照)標高1800メートル付近から下ではミヤマナラなどの潅木帯に入る。潅木帯では登山道は左右には広がらず、溝状に深く掘られている状態になっている。これらを見ると草地を通る箇所で登山道の荒廃(植生の破壊)が進んでいることが判る。

・森林限界~山の鼻

針葉樹林帯内の登山道は過去に深い溝状になっていた所には、道の両側に蛇籠を積み、真ん中に多数の丸い石を敷き詰め、周囲の林床とほぼ同じ高さにしてある。 歩きやすく雨水は敷き詰めた石の下を流れるので靴も汚れることが少ない。 急傾斜のところは木製の階段が設置されているが、濡れているときは滑りやすく、階段の段差や角度も大きくスリップすると非常に危険である。

#### (2) 植生復元状况

【南面登山道】の植生復元

展望テラスから上部のコースは雪田の縁に沿って木製の階段が続く。稜線側の斜面は高山植物が多いが、雪田側はまだ雪が残っていた。(写真:B-6、7)

雪の消えた雪田上部には砂礫の流失防止の丸太が斜面に対し横置に設置されているが、丸太の周囲には若干緑も見られたが、植生の自然回復はほとんど見られなかった。

<開花していた主な花>

オヤマザワ田代:雪解け直後のためか、目だった花はなかった。ワタススゲ・イ ワイチョウが僅かにあった

小至仏山展望テラス周辺: チングルマ・ハクサンイチゲ・オゼソウ・シナノキン バイ・コイワカガミ

鞍部~至仏山:ホソバヒウスユキソウ・キバナノコマノツメ・イワハタザオ・タ カネシオガマ

【東面登山道】の植生復元

至仏山登山道の中で、一番広範囲に荒廃が見られるのが東面登山道である。特に、 高天ヶ原直下の急斜面「H地点」(標高2050m)から「D地点」下部(標高1 780m)が深刻である。急斜面に加え蛇紋岩質の特殊な環境下において、永年人 為的な圧力が加わった結果、自然の力による回復は極めて厳しいと感じた。

表土が全て流失し地中の岩盤が露出してしまった箇所も沢山あり、このような場所ではもはや植生復元は不可能と思わざるをえない。(写真:B-15)

一方、植生回復への努力も細々と行われている箇所(写真:B-22、23)もある。写真の「D地点」は岩石で囲み平坦地を造り、そこに土壌を入れ播種や移植等を行っているが、試験的な域を出ていない感じを受けた。回復状況も毎年同じような状況で、植生の密度も面積的な広がりも一向に進展が見られない。おそらく試行錯誤の繰り返しで至仏山では「アヤメ平」のようにはいかない模様である。

(写真: B-24)

#### <開花していた主な花>

高天ヶ原周辺: ホソバヒウスユキソウ・タカネシオガマ・ジョウシュウアズマ ギク・ネバリノノギラン

高天ヶ原直下の急斜面: ハクサンイチゲ・ハクサンコザクラ・オゼソウ・ミヤマキンバイ・キバナノコマノツメ

中間地点(1814m):ハクサンイチゲ・ミヤマキンポウゲ

#### (3) 入山者の利用実態

鳩待峠の入山者数は195人(調査時間:7時40分)。鳩待峠の広場は人と車で ごった返していた。(写真:B-1)

至仏山頂の登山者数は115人(調査時間:11時05分)。狭い山頂は登山者で埋め尽くされていた。相変わらず土日に入山者が集中する状況が続いている。最近の傾向としてツアーによる「集団登山」が多く、そのほとんどが中高年者であり、服装や歩き方から見て登山経験は浅いように感じた。

ロープや木道・階段を外れて歩く人はいなかったが、花の写真を撮るため踏み出す 人が散見された。極めて稀な事例であろうが、登山道脇の裸地化した斜面に登山者の 足跡が残っていた。(写真:B-17)

拾ったゴミはアメの包み紙などで、極めて少なかった。ザックに大きなゴミ袋をくくり付けて下って行く登山者を何人か見かけました。「ゴミの持ち帰り運動」は周知 徹底されていて定着化を感じました。

鳩待峠から至仏山頂まで往復で5~6時間かかるこのコースにはトイレ問題も重要である。調査開始間もない頃は、笠ヶ岳分岐点付近の樹林帯内にテッシュペーパーが 散乱していたが、最近はこのような光景は見かけない。

#### VII. 今後の課題と対応策への考察

#### (1)登山道への対応

南面登山道の鳩待峠付近の溝状になっている登山道には石を敷き詰めて(これは東面登山道の樹林帯内で前例あり)、これ以上侵食が進まないようにする。

傾いて滑りやすい木道や木製の階段に替えて、周囲の石を平に敷き詰めた「石畳」 風の階段や登山道に改修などで歩きやすくすることで、事故防止と植生の保護や景観 の保持に繋がるものと考えます。

(注) 「石畳」の登山道では山形県の「月山」弥陀ヶ原コースに好例があります。 ネットワークでは平成17年8月に月山の登山道を見学し、その内容は昨年の本 報告書に掲載いたしました。

#### (2) 植生復元への対応

尾瀬は寒冷多降水地域で東面登山道は急傾斜地に加えてと蛇紋岩という特殊な環境下にあり、雨水による土壌の流失が著しい。降雨時の調査では、自然の厳しさを思い知らされました。植生復元にはまず流失した土壌の回復と土壌の流失防止策を十分に施ないと極めて困難と思われます。

また、過去に2回調査した笠ヶ岳でも既に登山道沿いの植生の荒廃が始まっている。

(今年は悪天候のため調査は途中で中止)至仏山の二の舞にならないよう、行政による 定期的な調査とそれに基づく保護策の実施を望みます。

平成9年8月の至仏山東面登山道の再開は、入山者を迎え入れることを最優先し、 植生の保護及び復元を軽視したものと言わざるを得ない。急傾斜地で裸地化した所は、 岩石の露出が年々多くなり、このまま放置しておくと植生復元は、一層困難になり回 復不可能になる恐れがあります。至仏山東面登山道は「登りの優先の一方通行」の規 制を設けて、一刻も早い植生復元への本格的(人的支援と財政的支援の両面)な取り 組みを強く訴えます。

#### (3) 十日集中の入山者への対応

入山者の総数を抑制するには根本的な対策として「入山規制」と「入山料」の徴収が一番望ましいと考えますが、至仏山登山者の8割が東面登山道を下りに使用しているという現状を踏まえて、まず東面登山道は山の鼻からの「登り専用の一方通行」にすべきであろう。登りの一方通行にすることにより東面登山道の利用者が減少し、人為的圧力の削減、下りに多かったスリップ事故等の防止などの効果が考えらます。

尾瀬は誰でも手軽に行けると思われがちであるが、至仏山の標高は2228メートルで、山の鼻~至仏山の標高差は830メートルもあり、れっきとした山岳地域である。東面登山道は蛇紋岩という硬く滑り易い岩と急傾斜地にコースがあり、スリップや転倒等の事故が多発しています。入山者の事故防止の観点からも、悪天候時には想像を超える危険があることや高齢者や山慣れない人には極めて危険なコースであること、更に登山開始時間(午前9時以降の入山は不可)の厳守などを、入山者や観光業者に対しての周知徹底が必要であろう。

また、トイレの問題に対しては自然環境保全の観点から「携帯トイレ」の使用を義務付け、入山口で携帯トイレの販売や回収をする制度の導入も必要と思われます。

#### (おわりに)

今年で調査開始10年となる至仏山東面登山道の実態調査を通じて感じることは、急斜面で止まることのない土壌の流失と遅々として進まない植生復元、そして土・日に集中する至仏山への入山者(平成17年は2万人)など、難しい課題が山積しています。

一方、残雪期の登山道閉鎖の定着化や尾瀬全体の入山者の減少(平成17年の入山者は31万人)など明るい動きも見られるが、新らたなに「ニホンジカ」や「ツキノワ熊」との共生、あるいは大量のゴミ投棄に見られるような過去の「負の遺産」の清算などの大きな課題にも直面しています。

私達(入山者や全ての尾瀬関係者)は、この貴重な尾瀬の自然を後世に伝える義務と責任があることを謙虚に反省しなければならない。「特別保護地区」並びに「特別天然記念物」の指定を受けている貴重な尾瀬の自然をこれ以上荒廃させてはならない。尾瀬の生態系の保護を最優先にした抜本的な施策(マイカー規制の強化、植生の復元、入山規制、入山料の徴収、恒久施設の域外へ移設等)が、官民一体となって一刻も早く着実に実施されるよう願ってやみません。

喫緊の課題として、至仏山の保全対策を「至仏山保全緊急対策会議」および「至仏山環境共生推進計画調査専門員会」にて早急に取りまとめて具体的な保全策を着実に実施していただきたいと思います。

百年後に平成時代の至仏山保全対策は尾瀬の自然保護に極めて有効であったと評価されるように、生態系の保護を最重点に長期的な視点に基づいた恒久的な対策の実行を重ねて強く望みます。

以上

## 夏期の「至仏山登山道利用実態調査」記録写真

調査日 平成 18年7月8日

南面登山道(鳩待峠~至仏山頂)および東面登山道(至仏山頂~山の鼻)

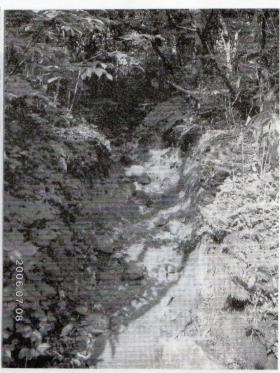


登山道閉鎖解除後の土曜日、花と展望を求めて場待峠の至仏山登山口は登山者で賑わっていた

(B 2)



鳩待峠近くの登山道は堀状になっている



(B 1)

(B 3

踏圧と雨水による登山道の侵食

(B-4)



左側に新しい登山道が出来、登山道は左右に広がる

(B-5)



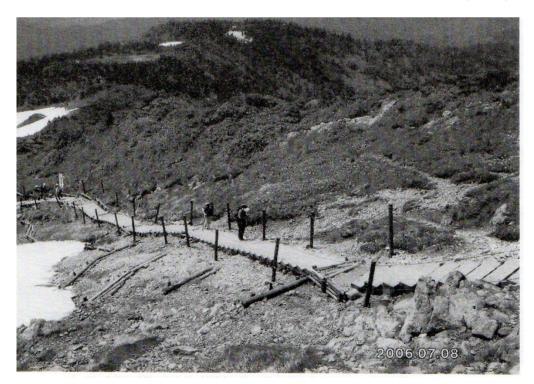
登山者の踏み付けと集中豪雨により侵食が進む南面登山道 侵食された登山道の深さは95センチメートルもあった

(B 6



展望テラス上部の木製階段の南面登山道

(B - 7)

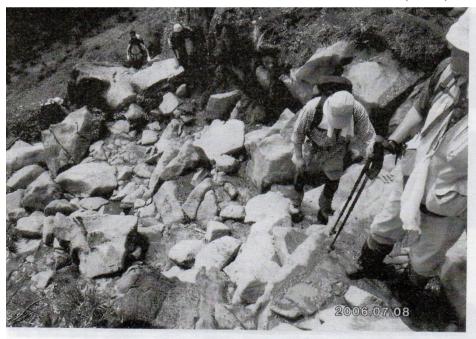


小至仏山南斜面のお花畑を通る南面登山道 裸地化した斜面は植生の自然回復の兆しが見えない

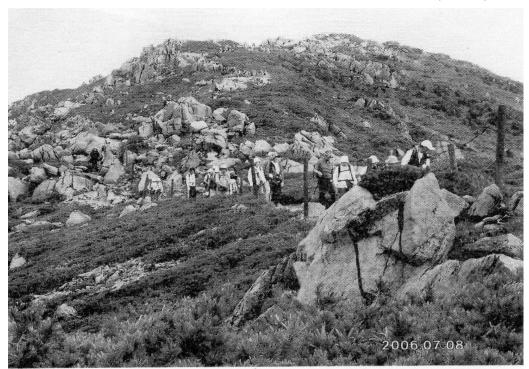


裸地化した斜面には侵食防止の丸太の柵があるが、その効果は

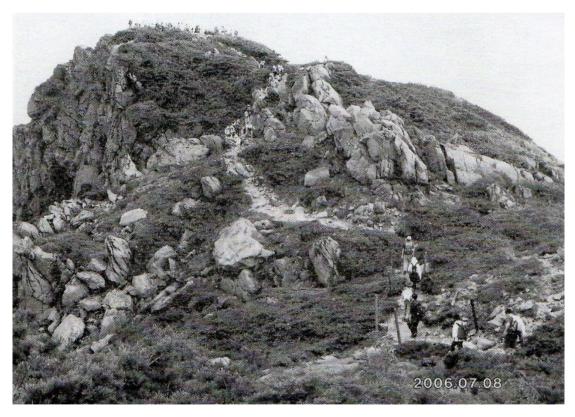
(B - 9)



小至仏山頂近くの急斜面、岩石(蛇紋岩)は非常に滑りやすい



登山者の列が続く「小至仏山~至仏山」の稜線上の南面登山道 (B-11)



至仏山頂 (2228m) にも沢山の登山者が見える



標高 2200 m 付近の東面登山道 左斜面は雪解けや降雨のたびに土壌の流失が進む 荒廃する前は、岩は土で覆われその上に笹が茂っていた

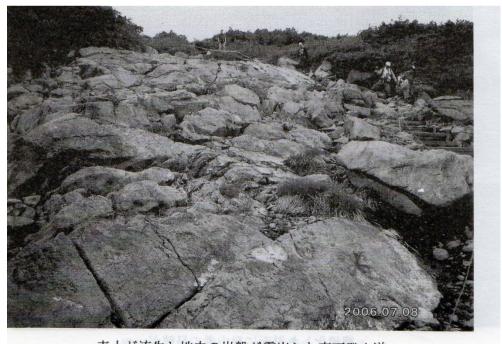
(B-13)



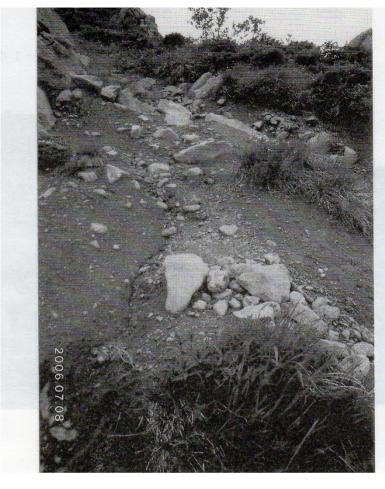
高天ヶ原直下の急斜面に延びる木製の階段 踏み板にはスリップ防止用の横木がある



大小の岩石が重なり歩きに難い東面登山道 ロープの外側を歩く人は見られなかった

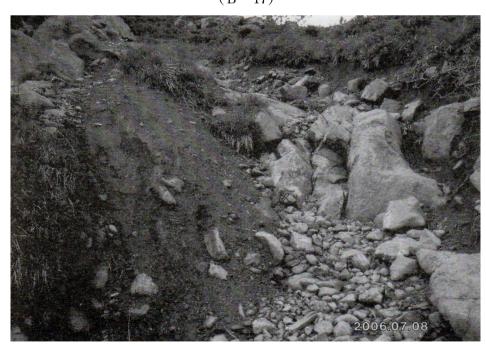


表土が流失し地中の岩盤が露出した東面登山道 蛇紋岩は非常に滑りやすく、特に下りでの事故が多い



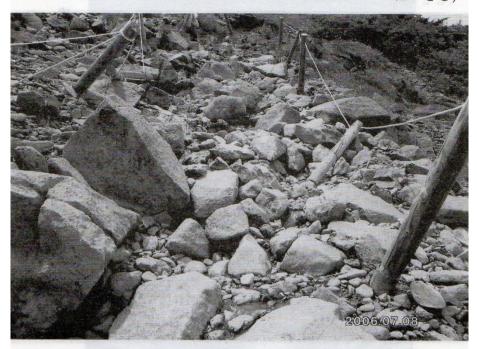
植生が破壊され裸地化した 登山道脇の斜面このまま放置すると乾燥によるひび割れと雨水による侵食等により荒廃は更に進む

(B-17)



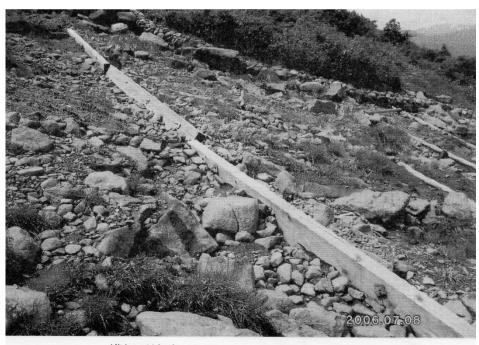
裸地化した斜面に登山者の足跡が・・・・

(B-18)

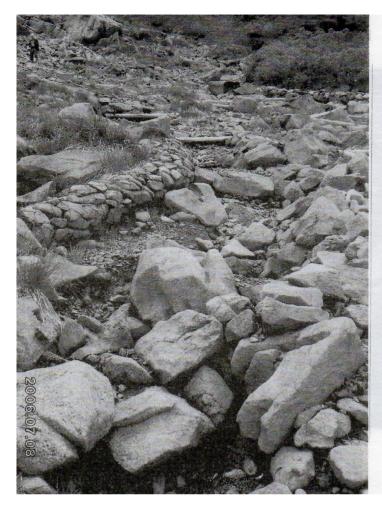


荒れる一方の東面登山道 (標高 1800 メートルの D 地点上部にて)

(B-19)



横板が流路コントロールの役をしている (標高 1800 メートルD地点の上部)



標高 八〇〇メートルのD地点の荒廃状況(その岩盤の上に大小の蛇紋岩が折り重なる登山道は左上を迂回している

(B-21)

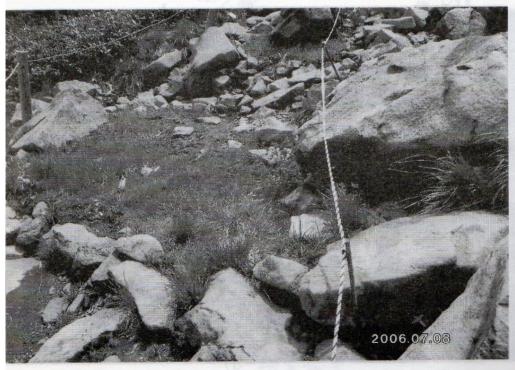


D地点における荒廃状況 (その2) 土壌の流出防止用の蛇篭と丸太枠



試行的に行われている植生復元(その1) ジョウシュウオーアザミやミヤマナラの 幼苗も見られる

(B-23)



試行的に行われている植生復元(その2) 生育状況や面積け毎年同じようで進展が見られない

(B-24)



ポットによる移植用苗の育成跡

(B-25)

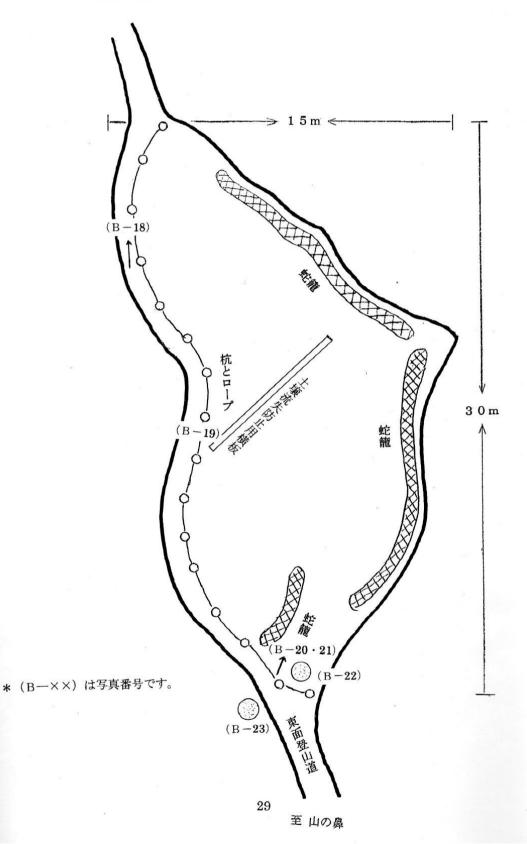


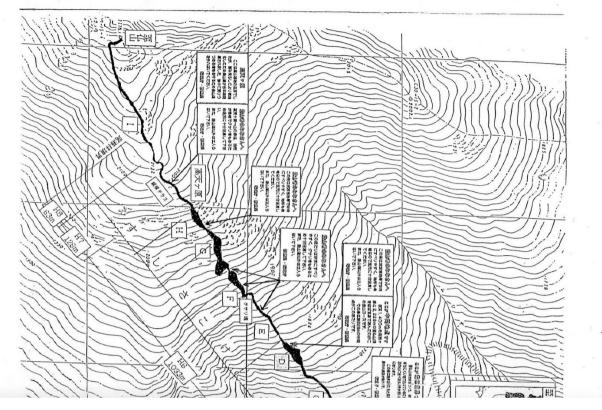
A地点(標高1520m)付近の東面登山道

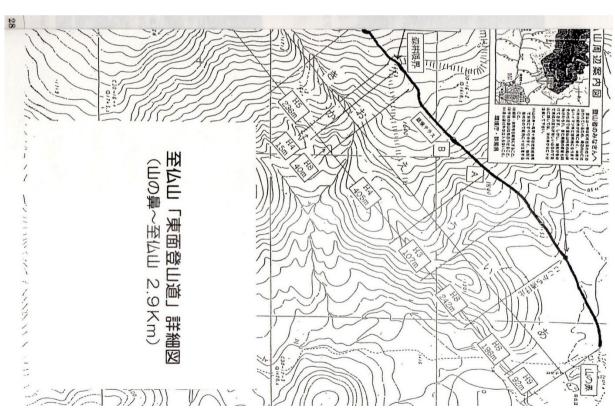
## 至仏山東面登山道「D地点」拡大図

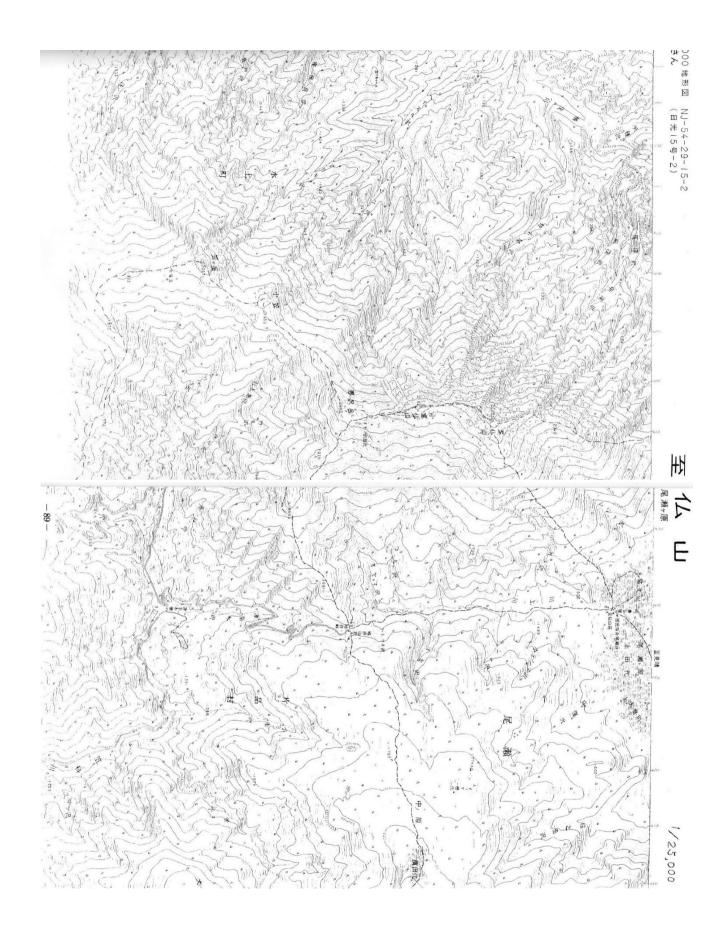
~ 標高1800m付近の登山道荒廃場所 ~

至 至仏山山頂









## 至仏山登山道利用実態調査報告書

## 【2006年(平成18年)調査】

## (非売品)

発行日

2007年2月1日

発行所

特定非営利活動法人 (NPO)

尾瀬自然保護ネットワーク

発行者

理事長 髙橋 喬

調查担当理事 永島 勲

住 所

〒100-0014

東京都千代田区永田町 2-17-5-203 ㈱SEC 内

電 話 03 (3581) 0321 FAX 03 (3581) 2178

http://homepage.mac.com/ozenet/

印刷·製本

有限会社 暁光社

埼玉県本庄市児玉町蛭川173-4

# 尾瀬の自然を後世に伝えよう

NPO尾瀬自然保護ネットワーク 東京都千代田区永田町2-17-5-203 ㈱SEC内 Tel.03 (3581) 0321